

助言者	高尾敏也	(岡山県教育庁指導課義務教育指導班指導主事)
司会	東有里	(倉敷市立赤崎小学校)
記録	大石智子	(倉敷市立琴浦南小学校)
	浅田由紀江	(倉敷市立真備東中学校)

## I 事例発表

### 1 読みたい気持ちを応援

### — 目に楽しい学校図書館 —

倉敷市立児島小学校 司書 三澤 邦子

#### 1. はじめに

私達の研究グループは、児童・生徒たちが日々利用する学校図書館において、どうすれば興味を引き、利用・活用されるための図書館にすることができるか、少しでも読みたい気持ちに刺激を与え、関心を持って図書館に足を運んでもらえるには司書として何をしたら良いのかを考え、実践・研修をすることにした。

現代の子どもたちは、生活環境の変化とともに活字離れが進み、子どもたちにとって一番身近な学校図書館も例外ではなく、興味を引かなければ本を手にとろうとしない。見た目で判断するということが多い児童・生徒には、視覚からの情報の部分が大きく、図書館の雰囲気にとっても敏感で、変化があるとすぐに興味を示してくる。そこで、児童・生徒の興味・関心を引き出す一つの方法として「読んでみたい」と思えるような視覚に訴えた資料提供の方法が大切であると考えた。

#### 2. 研修内容

##### 1) 初年度の取り組み

日ごろの各校での実践を、[資料提供班活動報告]の統一書式で報告し、活動内容や児童・生徒・教諭の反応、問題点などについて話し合い、参考にした。

##### 2) 次年度以降の取り組み

初年度の実践結果から、多くの児童・生徒が多分類の本を手にとる機会の多い“ディスプレイ”に焦点を当てることにした。「授業・学習のための資料提供」「読む楽しさに向けての資料提供」という2つの柱を設け、報告には「読書の楽しみ、授業・学習のディスプレイ」の統一書式を使った。

#### 3) 工夫したところ・使用したもの

##### ① 図書のリポジ

児童・生徒が、見やすく・手に取りやすく・借りやすい位置へ、テーマを決めて分類を超えて幅広く配架。見出しをつける。本の表紙を見せて並べ、そのコーナーに目を引くような掲示をする。別置を多くする。

##### ② 内容紹介の工夫

手作りポップ、イラスト入りの紹介文、新聞記事、出版社が出している本の紹介文、ポスター、映画のチラシ、本の帯などを添える。

##### ③ 児童・生徒の活動

図書委員が、月ごとのテーマを決めておすすめの本にひとことコメントを添えてコーナーを設置。ビデオ放送。委員会新聞。読書週間中に、児童・生徒の書いた紹介文を掲示。

#### 3. 感想・反省

別置することで、児童・生徒の視覚に訴え、読みたい気持ちを引き出すことができ、教諭にも一つのテーマでいろんな本があることを知ってもらえた。本の表紙を見せて配架すると、今まで動かなかった本の貸出に繋がった。しかし、勉強や人権などテーマによっては人気のない場合もあった。

別置する本に、ポップやコメントが付いていれば、自然にその言葉が目飛び込み、本に興味を持ち、貸出に繋がった。児童・生徒が書いたポップやコメントの場合は、書いた本人が宣伝し、「友だちが書いたので読んでみよう。」という気持ちになる児童・生徒も多かった。

実践活動を報告書にまとめることにより、反省や今後

の資料提供の目標ができた。他校の実践で良い所を自校に取り入れることにより、今までやった事のない実践に児童・生徒は新鮮さを感じていた。

児童・生徒の興味・関心や、世の中の流れを敏感に把握し、ニーズにあった資料提供と、図書委員の活動もあわせて“読んでみたい”と思わせる工夫をしていきたい。

ただ書架に並んでいるだけの本は、児童・生徒にとって膨大で、どこから手をつけてよいのか、また、どの本が自分に合っていて面白いのかが分かりにくい。書架に埋もれている多くの良い本を紹介し、利用されない本を一冊でも少なくしていきたい。

図書館で楽しい本と出会った経験の乏しい子どもが、必要に応じて図書館を利用できるとは考えにくく、逆に、図書館が好きで“面白い”と言う経験をたくさんした子

どもは、もっと知りたいと言う気持ちが生じた時に、図書館へ気軽に足が向くようになると思う。日頃から、図書館を『近い存在』『頼りになる存在』として認識してもらえよう、資料提供に今後も取り組んでいきたい。

#### 4. おわりに

私たちは、児童・生徒の興味を引き出す第一歩として視覚に訴えることが有効だったことは、今回の研修を通して強く実感できた。今後は、今までに見られた児童・生徒のリアクションを上手に活用しながら、さらにインパクトのある資料提供を考えていきたい。そして、より積極的な働きかけをし、学校図書館の活性化に結びつくように実践を続けていきたい。

## 2 ?から!にかわる学校図書館

倉敷市立川辺小学校 司書 土師 聡子

### 1. はじめに

倉敷市学校図書館協議会司書部会では、平成14年に作成した「学校図書館運営の手引き」を基に選書を行ってきた。しかし、実際に学校現場で選書をしていく中で現在の基準では、判断しにくいことがあり、今回学校図書館であるということを念頭において、分類や内容・語句を見直し、使いやすい選書基準を考えてみようとして研究してきた。

これと平行して、平成17年度に小学校、平成18年度に中学校の教科書が改訂されたことに伴い、図書館への問い合わせが一番多かった国語科のブックリストを各学年ごとに作成した。このブックリストを参考に資料提供を行った実践報告をする。

### 2. 選書基準

平成14年版『学校図書館運営の手引き』には、基本的な資料選択基準と全国学校図書館協議会選定基準の掲載のみで、倉敷市学校図書館の方針を明確にするところまでできなかった。そこで、様々な他の図書館の選書基準も参考にし、日々学校図書館の運営に携わり、児童生徒、教職員の利用状況を把握している司書の経験から、倉敷市では現在何に重点を置いて選書しているのか、今後はどのようにしていかなければならないかを話し合い、

物語や理科・社会などの部門別に分け、さらにその中を日本十進分類法に基づき、分類別に研究していくことにした。0の総記から9の文学や絵本、マンガ、郷土資料を研究した。これからも、さらに研究を深め、学校図書館に即した選書基準を作っていきたいと思う。なお、この選書基準がまとまったら、司書部会全体の場で新しい選書基準として、提案できたらと考えている。

### 3. 小学校国語の実践発表

#### ・倉敷市立川辺小学校の実践

選書班で作成したブックリストを自校で配布したところ、3年生の担任より「大事なことをかしかめよう」という国語の単元で、「食べ物について本を使って調べさせたい」と依頼があった。

担任は児童がどんなものを調べたいか、事前に調査をし、グループ分けをしていた。主なものは、たまごグループ・豚肉グループ・お米グループ・牛乳グループである。テーマが決まったら、具体的にどんなことを調べたいかを決めて、司書にも知らせてもらった。

司書は、テーマに関連した資料が自校にあるかを確認し、足りない資料は公共図書館で借りて準備をした。子どもたちは、国語と総合の時間を使って、図書館でたくさんの方を調べていた。担任は、子どもたちに絵を入

れたり、グラフを使ったりして、わかりやすくまとめるように、指導をしていた。

特に、お米グループの子どもたちは、本物の稲穂を貼り付けたり、クイズを取り入れたりするなどの、工夫を凝らして上手にまとめていた。最終的には、四つ切の画用紙に書いたり、紙に調べたことを書いたりして、後で本のように綴じるという方法でまとめていった。たくさん調べた中から、発表したいところを1人1つ決めて、

2クラスの児童が1教室に集まり、みんなの前で発表した。発表後、疑問に思ったことや、感想などがたくさんでできた。

この調べ学習をとおして、司書は実際にどのような資料が必要かよくわかり、今後の選書の参考になった。また、いつ、どのような教科で、どのような資料が必要かということ、担任と事前に打ち合わせておくことが大切だということもよくわかった。今後も、たくさん

とを調べたいという子どもたちの要求に対して答えていきたいと思う。

#### 4. おわりに

今回の実践で、私たちが作成したブックリストを、担任が授業の計画を立てる中で活用することより、調べ学習での資料の選択の幅が広がったり、子どもの実態にあった資料を提供したりすることができた。学校図書館と連携することで、多くの資料を子どもたちに提供することができ、授業が深まったとの感想を担当からいただいた。

また、選書基準の見直しでは、時代や児童・生徒の実態にあったものを取り入れる必要性を感じた。

今後も様々な教科と連携して、授業にあった資料を選書し、提供していくことによって、「問題解決をする場」としての学校図書館の可能性を探っていきたいと思う。

### 3 生徒の興味をひく資料の展示 — 「連想」から広げる —

倉敷中央高等学校 司書 加茂 清太郎

#### 1. はじめに

生徒に、「気持ちが楽になるような本ありませんか」といったような質問をされたら、司書は、生徒と直接話をして、生徒の望む資料を探し当てていく。しかし、直接司書に尋ねてくれる生徒は、残念ながらそう多くない。いろいろと考えて提示した資料は、直接尋ねるだけの執着がない生徒にも役に立つのではないかと、わかりやすく目に見えるところに展示するとよいのではないかと考え、備中地区司書部会で昨年度からこの取り組みが始まった。

展示を作成する上で、①できるだけたくさんの方の資料を手にとってもらえるように、②本のリストではなく、視覚に訴える展示、③棚の中で目立たない作品に光を当てるように、の3点を念頭に置いた。

#### 2. 研修内容

##### 1) グループ研修の取り組み

まず、感情にまつわる本を集めることにした。しかし、テーマが漠然としすぎていて、何を調べばいいのかわからなくなったので、「うれしい気持ちになるとき」を具体化して、テーマ「誕生日」で再度本を集め直した。

選んだ本の表紙をカラーコピーして持ち寄り、どのように展示するかを考えた。まず、分類順に並べて表示した。分類順の利点は、図書館には様々なジャンルの本があることを知ってもらえることだ。上手くいけば、新入生オリエンテーション等にも活用できるのではないかと期待したが、できあがったものはわかりにくいものになった。

原因としては、次の3点が考えられる。

- ① たくさん集まる分類と、そうでない分類がある。
- ② 選んだ理由がわからないと、なぜその本が展示されているのかわからない。
- ③ 選んだ理由が同じでも、分類がちがうものは離れて展示されるため、まとまりが悪くなる。

そこで、選んだ理由を短いコメントで掲示し、その周りに本のコピーを集めた。わかりやすく楽しい展示ができあがった。しかし、9類の小説やエッセイの紹介が難しい。題名から結びつかないものや内容があわないものが多く、展示しにくかった。文学作品に関しては、番外編を作ったほうがいいのか、という意見も出たが、昨年度は仕上がらずに終了した。

## 2) 倉敷中央高校での実践

### I. 芸術鑑賞会のPRのための展示

盲学校が舞台の演劇が上演されたので、視覚障害に関する図書の展示をした。先のグループ研修の方法を応用し、図書委員に作業をしてもらった。

作業手順としては、

- ① 劇のパンフレット見て連想される言葉を考える。
- ② 色画用紙にカラーペンで連想した言葉を書く。
- ③ 連想した言葉に関連する本を書架から集め、本の表紙をコピーする。
- ④ 模造紙の中心に演劇のパンフレットを、その周囲に連想した言葉の画用紙を、さらにその周りに本のコピーを貼る。

担当した生徒たちにとっては満足なできあがりとなった。図書の検索方法や、図書館のどこにどんな本があるのかを確認することができた点でもいい経験になったと思う。通りかかった教職員にも好評だった。

問題点は、場所を取ることである。また、この展示は、残念ながらあまり貸出には反映されなかった。

原因としては、

- ① 広報をきちんとしなかった。
- ② 紹介した本が全体的に古かった。
- ③ 寒いのに暖房が入らない時期だった。

展示場所が出入り口のそばで、立ち止まると邪魔になった。

### II 修学旅行関連図書の展示

修学旅行に関連した展示を実施した。学校行事に関連するものは、多くの生徒が必要に迫られて展示物を利用してくれると考えた。

旅行先が3ヶ所あるため、各旅行先の担当を決め、その土地から連想される言葉を考えてもらった。また、「修学旅行」そのものをテーマにした展示も作成した。

旅行に行く2年生だけでなく、すべての人に楽しんでもらえる展示を目指した。手順は前回と一緒である。旅行先のパンフレットも活用した。

前回の反省から、広報で、展示する図書の一部を紹介し、展示場所を、館内の中心部にし、4ヶ所に分けた。新しい図書も購入し、新着案内で紹介した。この結果、個人的感想だが、展示の前で立ち止まって見てくれる生徒が多かったように思う。反省としては、選んだ理由がわかりにくいものには、ひとつひとつ説明を付ければよかったと思う。

### III 広報と展示を同時に作る

グループ研修の仲間に、「最初に広報を作って、それと全く同じように展示を作る」という方法を教えてもらった。(天城高等学校)

### IV 新入生オリエンテーションへの応用

テーマは「入学おめでとう」とし、紹介する本を考えた。学校の授業や行事などで必要な本と、生徒たちに人気のある本を紹介した。紹介した本の別置はしなかった。

話題の本を紹介しながら、予約サービスについても説明できたので、予約がよく入るようになった。問題点としては、紹介したい内容がNDCの分類におさまらない点である。

## 3. おわりに

これらの実践を通して、自分の図書館の蔵書に対する理解を深めることができた。また、生徒がどんな状況の時にどんな本を必要とするのかを考えながら作業を行ったため、生徒目線での図書の選択ができるようになった。学校図書館のあまり多いとはいえない蔵書を、フルに活用することでそれなりの展示ができるようになった。

今後の課題として、文学作品を紹介するいい方法はないか、また、こうして作成した展示の情報を他の学校と共有する方法はないか、を模索していけたらと思っている。

## II 質疑応答

岡山市立中山中学校司書

・『読みたい気持ちを応援一目に楽しい学校図書館』への質問

Q:「人権について考えよう」をテーマにディスプレイをした結果、評価が△になっています。こういう評価があまりよくなかったとき、貸出につながるような話し合いをされましたか。

また、評価がよかったときもどういうところがよかったのかという話し合いがされて、今後活かされるようなことはありましたか。

A: 人権や平和などがテーマのときは、どの学校も貸出がないというのが悩みだったので、キャッチコピーを考えたり目を引くようなタイトルをつけてみたりしました。また、グループでどんな本が貸出につながったか情報交換をするようにしました。

1ヶ月ぐらいディスプレイをしていたので、よく読まれる本と読まれない本がわかってきました。よく読まれる本を残して、読まれない本は変えていきました。

Q:「資料提供」という言葉がたくさん使われていますが、「資料紹介」とどう違いますか。

A:自分たちの研究グループでいろいろ提供したことで、「資料提供」という言葉を使いました。

・『?から!にかわる学校図書館』への質問

Q:実践したことによってどんな資料が授業で活かされたことがわかり、選書基準の言葉に活かされるようになりましたか。

A:まだ研究の途中なので、これからの課題にしていきたいです。

Q:選書基準の見直しで、時代や子どもたちの興味・関心が以前と変わってきていると言われましたが、どういうことが変わってきましたか。

A:最近の子どもたちは視覚に訴えたものをより好むようになりました。

笠岡市立大島小学校司書

・『?から!にかわる学校図書館』への質問

Q:調べ学習のとき、子どもが前の時間にどの本を使っていたかわからなくなったら、司書はどうしていましたか。

A:子どもたちは自分が使っている本をよく覚えていたので、困ることはありませんでした。

Q:参考文献を書くように指導されましたか。

A:担任の先生にお願いをして書くよう指導してもらいました。しかし、なぜ参考文献を書くのかという説明はできませんでした。

Q:14時間も調べ学習に図書館を利用して、他の図書のとぶつかることはありませんでしたか。

A:1週間にすべてのクラスが図書の時間を使っても、本校は10クラスしかないので、空き時間があります。担任の先生と相談して、空き時間に利用してもらおうにしました。

### Ⅲ 助言

まず最初の『読みたい気持ちを応援一目に楽しい学校図書館―』である。ご承知のとおり、活字離れが指摘されて久しい。様々な原因があるだろうが、そういう現実がある。その現実を見据えた上で、子どもたちの「読みたい」という興味・関心を引き出す工夫が求められ

ているのだと思う。今回のご発表は、その興味・関心を引き出す1つのキーワードとして「目で見る」ことに焦点をあてて、視覚に訴えた資料提示、提供、紹介についての発表であった。

よく「人は見た目じゃない、中身だ」と言われる。その一方で『人は見た目が9割』という本があるが、見た目が人に与える印象というものは大きいものがある。学校図書館の設置されている場所や広さなどといった環境や設備面とも関係してくると思うが、まずは図書館に入ったときの雰囲気、書架のレイアウト、掲示物の工夫など、足を運ぼうと思える環境の整備というのは不可欠だろうと思う。

足を運んだら、次は本を手取る工夫である。今の世の中、情報が氾濫している。子どもの世界も同じことだと思う。それらすべてが頭の中に入ってくるわけではなくて、取捨選択して頭の中に入れていく。少し前なら「この本には何が書いてあるだろうか」と手に取って、中を見て本の世界に誘われることが、当たり前のような時間としてあった。しかし、もしかしたら今の子どもたちの多くは、本を手取る前に本の中身を知る必要性というものを、無意識のうちに私たち大人のせいで刷り込まれているのかもしれない。そうならば、手に取る前に必要な情報を提示する工夫を積極的に考えていくということも、ひとつの方法だと思っている。どんな内容か、どういう人にお薦めなのか、紹介のポップを見ることで必要な情報を得ることができる。そうした工夫について考えていくことは大切なことだと考える。

ただし、情報過多にも気を付ける必要があると思っている。たくさんの情報を提供することによって、逆効果になることがあるということである。情報が氾濫しているので、子どもたちは何を選んでいいのかわからなくなる。情報を与えすぎることによって子どもたちは何を選んでいいのかわからないという状況にもなると思う。例えばテーマを決める、学習と関連づける、季節や学校行事と関連づける、といった工夫を盛り込みながら、視覚に訴えるような工夫をしていくということが大切だと考える。

次に『?から!にかわる学校図書館』の発表である。選書の基準については、全国学校図書館協議会の選定基準やいろいろな選定基準があるが、それらの基準というのは最大公約数的な基準であって、実態に即していないのではないだろうかといった課題意識をもとにした発表であった。今後、学校の実態等や目指す教育というもの、ある程度の時代の流れというものなどと照らし合わせな

がら、まとめていってほしい。他の地域の参考になると考えるので、地道な研究をお願いします。

また、授業に活用できるブックリストについてである。学校では様々な教科を教えていくが、そのためにはたくさん資料が必要になる。図書館は、まさにそういった資料の宝庫である。しかし教師の中には、自校の図書館にどんな本があるのかわかっていない人もいる。したがって、こういうブックリストを作成することは、非常に役立つことだと考える。

新しい学習指導要領に沿って、教科書の題材も順次変わっていく。今後、教科書にどのような題材が盛り込まれていくのかわからないが、研究のノウハウを活かし、また司書教諭がいる学校については、パートナーシップを持って、学校の実態に即したブックリストができればと考える。

前回の学習指導要領の改訂で、総合的な学習の時間が入った。いろいろなことを調べたり、まとめたり、発表したりする活動の重要性がいわれるようになってきた。ところが、総合の時間になると教師は、とりあえず「図書館に行って本で調べなさい。」ということが多くなってきたのではないかと思う。子どもたちは、調べたことを本から抜き出す作業ばかりをするようになっていないだろうか。抜き出すことが学習だと思ってしまう。抜き出したものの中に、難しい専門用語や聞いたことも見たこともないような漢字が含まれていても、そのまま読んで発表して、「よく調べたね」と誉めてもらえる。それでは、本当に身に付けるべき学力が身に付いていない。総合的な学習の時間だけではない。国語や社会科、理科などの調べ学習も、そうした傾向に陥りやすくなるので注意が必要だ。

最後に『生徒の興味をひく資料の提示―「連想」から広げる―』の発表についてである。できるだけたくさん分野の本を手にとってもらうようにすることや、そのために視覚に訴える展示を心掛けるといった点は、最初の発表とあい通じるところがある。図書館に足を運んでもらう工夫のひとつとして、展示、別置を行うといった実践だった。

ここでの大きなポイントは、生徒のニーズをどのように把握するかという点が挙げられると思う。今回の実践では、特に図書委員会の活動を利用されていた。子どものことは子どもに聞くのが一番である。また、子どもたちの書いた紹介文だと子どもたちが子どもたちのこととして考えることができる。そうした点で、倉敷中央高校と倉敷天城高校の事例が紹介されていた。高校生は発想

が豊かだという感想を持った。

また委員会活動についてだが、委員会活動が教師のお手伝いをする時間になってしまいがちではないだろうか。例えば、体育委員会で体育倉庫の掃除やプール掃除を委員会活動の中で行う際に、子どもたちに「今日の活動は、掃除。」とだけ告げて手伝いをさせることが多くある。委員会活動というのは、特別活動の中に含まれる教育活動である。望ましい集団活動を通して身に付けさせなければならぬ力というものがある。しかし、教師のほうが何かを仕掛けて活動させて、子どもたちは活動の目的もわからずに、とにかくやり遂げるという結果だけを満足させて、どんな力が育ったかというところには目が向いていないというのが、今の委員会活動の現状ではないかと感じている。その活動を通して子どもたちに確かな力が育っているかどうかということを忘れずに検証してほしいと思っている。